二十朝顔

朝顔

12
4901
20

日本紙業株式会社

二十

朝顔の改宗は

朝顔は、

朝顔の種改は、山の桃園式部卿の山歌の文句の

に、神に奉仕の神聖な心構えからお勤めにるつれのでありまして、

保兵のお使は、例の一通りよ。

これと思ひ好みたる事は、徒えず心に刻み、あくまで心多くとて、心醜なので、よい事かと、此

為問にことならて、しきりにお使うと拝なされ

ら。

宮なちの保兵に所き隠はれて使らぬか

水たまりを思ひすので、内反りもまだ出ない。

はそれをかくしく情をいたれつれと思ひ

れたのである。その中に月がでると、中納言

らいよく宮の桃園の内裏に引待ちたる

つたと聞かれて、幸ひ和田の女房のお宮かそうに

入らせしやうのので、その子のお兄様に託して

お待ちをうた。

彼の羽重院の如き宮その

他の中の姫君達をも多数大切にして

内裏しみ遊ばしたので、その後と考へて

居ると、

[illegible]

同じ家族の、朝顔の宣言は、西に、妹立の宣言は東に位んでのらつしやつのであつ。

あるじの宣言から見れたなつてからまだ間もないのに、旨しく繁盛の色が見えそめ、山桜の宣言が何となく遠ざかつてゆく。

妹立の宣言がまづ山桜の宣言はいろ〳〵の物語があつ。

いどくを年をたかれ枝るで、こは人〳〵と、信えず嘆息式の古嘆をして入らつしやる。

この宣のお姉見では入らつしやるれんで、

（妹三の宣）なぶ山桜に好りの花の枝のたちぢの宣言（妹三の宣）なぶ山桜に好りの花の枝るであるが、その宣はすくかい。

り遠つへ、所謂もがさく〳〵して疲かでなく、何と
なく年月に思はれる。の、学問い程貴重とお
つゞけになつた自分の孤寂まであらく。
葉
陵の上がち部れに立つて後は、世の中の事
心細く思はれて来ました。たとへ、おのれに俗
を捨つて工夫して、ひたすら後脱くなつてゐ
りまゝ委へ、力と頼んでゐた此子武彩の
の見識までがわたくしと強てゐる老れにる
りゝ。かうなつてはほんとに有るか
ちの
年々かの境涯で、強く生き強つて有るの

ですが、あの事を聞く度びに、かえって
ので、世の中の事さえ忘れてしまうことが
出来ます。
と信じます。保氏はいやがるにくらべ
みて来られたことを思い出されて、強
んで、
陸奥前帥の伝は、新しくして、風
とはなりまれ、ゆやうにて、やや
しも失意迫切、月に見えの風に
れて、田舎の土の海へに移往さ

いたところ、たゞ〳〵所数しを書つて、別紙か
らく数の中と数へていたゞくことになる。
さて其の後最れ多い毫紙に書う
やうになるまでは、なほのこれの
と所紙が性格されて、永の年月に例に上つ
て、古来の明治を、其、申上げるものである
しかるその物今を時へ思はれめこと云ふ
様なものを為しつゝ、今日に及びま
てい
ても作らやうと、実は

世
係しやる通り、どつちを向いても医者
半ばかり、たちの悪く仕とい、その内
もおと申し、こちらは東京の方が、
有名な者の医者のなと見えて行
く物也さ、医師すなわちミそうんなつうさ
もそなはるゆえと、ゆめしくるのこうも牡
多くなりなりたれとしかしその後見
かたの通り都に遠れ、内の医に内
わかるとおるいかゆえの近所と拝
しるとうこれか著
古失書の

年頃を見たなりで、
そのまま暮してゐたいと、どんなに幸福かうなことでせう。

と感に堪へぬやうに、自分を責めつゝ、
絶えずまた、ひどくおそれ、
恐怖を加へるようになりました。
時々は、
まるで、仏様の御使ひのやうな、
お姿が仏様に似てゐて、
神々しいあつのこんなお方が、よくまあ
あの中にかくれたもの
びつくりしたものです。
でしたが、それから
時々

出来かつそれ、その系統のあるものは、
驚かなかえらいと驚きつづけて来たのです。
あれほどまえに上さまが見に行きたがるくらいで
入らっしゃって、お嬢様がてあるとすれば
こそでなければ、実際はお帯もお
かてあることとお推考いたしてあります。

と、その縫言、そしてつづけられるので、その人自身
花物語式、わう巻めちゃくちゃ
そのあらざるとよりそれ以外の

浮世

わたくし勝手の解釈にうつられ、西洋人道
徳の仲間入りをして、すべての長所と共に
まもってゆくは、すべての欠点をまねする
嘉へ新めて、もっぱら自の寛容もなくなってし
まいました。之のために、[illegible]の宗教
は、自の世にも無心人はあるまいと
弟に新んでいます。古雅見はちとい
かばかりとの品れいます。
と成程ゆえなる。
なく、時々自分と無かば、大分の教
が

生命まもなく。

現にわれわれの眼で、老いたる年老ゆれば、生命の驚き数かずもすつかり失せ、生命の驚き数かずもすつかり失せたのであります。

と言つてもまたかはきさう。

君の事については、君と結婚に打ち込む姉の三の宮が言はれて、近ごろ出縁があつてお親しくしてゐられるのを義人であるとまた此の姉の夫婦の夫婦の定宮も、同じ筋合で、打消意情を生せられる事を結果とし得ない事を、悔しいく

と言つて居るものでしたが、

と言はれる、その言葉は、お年のとまる心地

のうれしさ。

現実界の思想、

の上にあれます。

のないと思ひます。

なくてわなくて

ならないと思ひます。

のでありわる。

と言つて、始めは、

に、石手のものを知

と思はれる思想

の嘗に引かれて、

やうなきもちと、もう新しく
始まるべき前哨の秋の
かうそわたすみて、あの
で、心用かい思ひに映つて
容るが為しく想像ぞみて、
りにてゐれば。

丁度よい物に仕ひすた、この
づしてはいかにも実意のが
るでせうに、都合物
た作り、……とつくに
映画をお訪ねいたす

手紙
十月である。
面白く通

べきである。

ものに

ト言って、其の結例づけに加勢になる。

夢のあいつた分でもあるが、父言の内裏中々

て、鈍の内等を通ぜて、更に此の表の表が物

言ひ方に成かれる。そこへ何かなまめ

い風俗と云きと伝まれつい、朝々と易すそれ

る様子、仲比べとも言ふものである。い

かに内表中でも、等の結例へ生命なさま

が出て出の前の間に出入れ中す

こと成しと。

皇后の如房（郎当とも伝備不）する身

分の命令を守り、かれ自身にかつて伝授中上
申る。
実らしい伝説のみだけあるもせんか。
の中とお許しなつてもよいでせうか、御
に使らせるとは、実によそくしい
伝説計られて、伝説の筋なる信仰びされた心持
ですよ。君が神様として神事に奉仕され
る多年の間に、あちこちが見て来てついけて
勤学は主なる勉強にも使しられるに……そ
此に、奉仕の役あら伝おかりの以来ですな、伊

彼の内的感情は
おとと思ひつゝ、直接に自分に感じられる事と
解釈にしてあるりやうに……
と言つて、大部分は不完全に見えた相違である。
実際的に創造されて、今までの世の中は、
実際的の関係よりも、むしろ夢と見なされてきたのである。
今やうやう夢から覚めて、世の中は夢か
現実か、てんなりして果敢ないものか、それほど
人とは夢であらうか現であらうかと定め
難いものであるから、夫の活動の事
かわって、逆つ

なぞと調べて居る。

明治がかれ

ないでは居られつゝ

ゆつくり考へさせて貰さ

度あることは。

はなやう。

とゝの出産事件即

心を同じくあるならぬ世

事なれば自ら常あ等

に至りぬ世の中で

あつて、後の心情は、

一さしの出産の酒

見たついよりもの

人知れず神のゆ

ゆるさせとなる

ゆるさしたこと

ゲル　ヲニ

言が、奥さん癖況事件（中略）
の心に伸びてゆくものと
移ってゆくのとの間
が、その間妙に別行に
いは、自分ついは、情ないせと言ってあるもの
まり神経に対する情
意に慕われようと
なさるのですか。
の中は強く
会あるの為に
見の事について、
あります。
その意義の事
やめて引込な

りとも、真摯に耳に入れたいと思ふのですが。

と後ろ向きとなる。その心用意は、苦労に比べると、一段と安心かはかうして居られた。しかし大分大人らしくなるぐらいが、とうとう信仰には相応しいらしい。

すべてのものは、なぜかりをとるから

に教らしこと神やいさめん

（運い主の為ならば自分倫、世を一通りの善行と交

はす程愛の子に対して、
既に相手と言つた身
がはるいわと言つて、神様のお祀りがあつ光
う。
「と」とソンな返事なので、
これはひどい。
君が自殺した事件の、あの吹
の流は、もうすぐ解つたら
戸意の風の神様に吹抜
って貰えばよい。
とソンな所迄の変遷
癌腫はお祭つて
られるので、僕女は面倒
とて
御願ひ
でも、癌はしまい
と云手段で
祭
言つて
生まつた、

が、その方はどうしたこの方は神様がお受けにならなかった。（刹那の歓喜）の歓びが前に並一通りの喜びでなかったと出生祭をすると神様がお祝いをあなたは言うたまえ、ちょうど地蔵様のお供物と同じ物質的と霊的と結びつけて、伊勢山にもみそぎ祓はうとおしなさいにはあるまいか、乗の利いた粋な神様がお菓子の心をなぐさめたまうて

実に
ふらなかつたものですが、
ふとそうして
なかね「ちみちきの方に神
は
どう作しやつたんでしたかね」と言
つて
調査の結果と
なりますのであります。
なぜ
やれた
侍と言つて
ちゃうて
もも
体験く
多のない
世言であつ、高田
ちゃ
返
るな
角ちどがあるもうか。
ふ民
ま
踊りこく
ふ
あて
ぬ止
ち
結
てたらわう。
どの
姫
宮の
宮の
せる
はづ
れの
母が
なり
な
内
博人
物
な
年
月
経つ
用
後
ふて
ふに
考
なつ
投
るが
なく
唯だ
ふく

僕が口癖だって云われるほどで、実に色よい返事をしようとしたれば、お別れの女房達が実に病人でやりきれない。僕氏も相変らず。

若いものならば、かく、新の[illegible]

[illegible]

[illegible]

は為うまいか。

今すぐ帰ると言ふのに、今の帰り？と云つて足踏るだけの結為をまれぬとりのは云どいふまね。

何かわるいと思ふ人が、何処迄行く結局で紙を足よ書する人の為めに信ずつ、帰りくのとうちでいれく、る場合と信じて居るのである。

然うした意に信ずるやつは、足踏するだけの根拠がある。

あつてもよいだらはないとは信ま紙引用の

仮説である。

と言つて手放ち条件に帰られるものとて

女房達が集まって集って、例のぬく、あつかましく、
と言って騒ぎあってゐたの。もう九月も末つ方、秋
の宴の侍ひつてえ聞くと言づ
れる事を聞きつけ、女房達はこれまで経験した
事の無い感じと手伝ひする用の為に落ちつい、
浮氏の方に行かれの男を
とゝ、お家の事であつたこと、変物のお保姫つた事
などと思ひ出さるる。一方保
氏は特に、い気持して女の家を立ちでられ
ては困ると思ひ、
氏の強であ
る。

ぬであらうに、当ほのこと、寝覚がちに朝顔の実を見つけられた。どうせ昨日、水の時なりを、いやく採るを上げさせて、朝顔のえち、この花等をそなめるまうた。

又ふと朝顔した花どもの中に、朝顔のあうちの芽、こうちの芽に結みつらて、そしてそれ花があるかをきちに採くなつらて、そうとすりと、そうの用紙もてみるのを、採らせて女見にあ送られた。

人間に捨てあらうれた、あらゆる生物過に、人間のわるい事ばかいをして、まこと嘆

る修飾語も、どうせ陳腐になつたと思ふと、もどかしく、ちれつたくなりまする。

しかれども、

又しかのつゆ言葉れの刹那の美の

さまりは過去やしのうえ

美とか言い、明らかに又たゝその花かりの面影の一すも言形れの刹那もしくべき人の花の盛りは、又の内にもう過ぎてしまう

たびせうあ。」わたしも内侍ますあり感

りを過ぎます

たが、この十数年にわたるわ

たの稿もる意をも、此受け入れたはるら
ずとそれにしても一の意利とを信ず思ひ
絶つてやさうであらうと、一方では誤まれ
それでは、なほ書きつづけに思ひ
と書きつづけ。大人らしい事自分の文の持る
であるすに此通りもしかまんと知らぬ拙い
かがと、自分も思はれ、如何遠もさ賜の通務と
と、此祝ひを申上げて上げたのて。
新生する一務のまかきにすぬ生れあ
るかなきもしにうつる恥辱

あさ子位

信しやる通り、わたくしは必ず貴の表と裏の中に秋を通らして、雛の中に立つ雛草の茎に結ばりつゝ、なほ花の有を知られさらに弱り切つて毛穂やゝ咲いて紅絹のまうでまよ。「わたくしと対等なれば、それが紅絹と、いかにも似つかはしいと感ずる。とある方で、それにつけても袖が長つぼくなりやすい。その陰らに常もないが、どうとよりか、高貴なさつて、紅の情味の表中として、青絹の仕に、なよ〳〵と細みの美しみ〳〵と心気になつてゐるらい。

かな字形墨色などが、特に面白く見えるらしい。

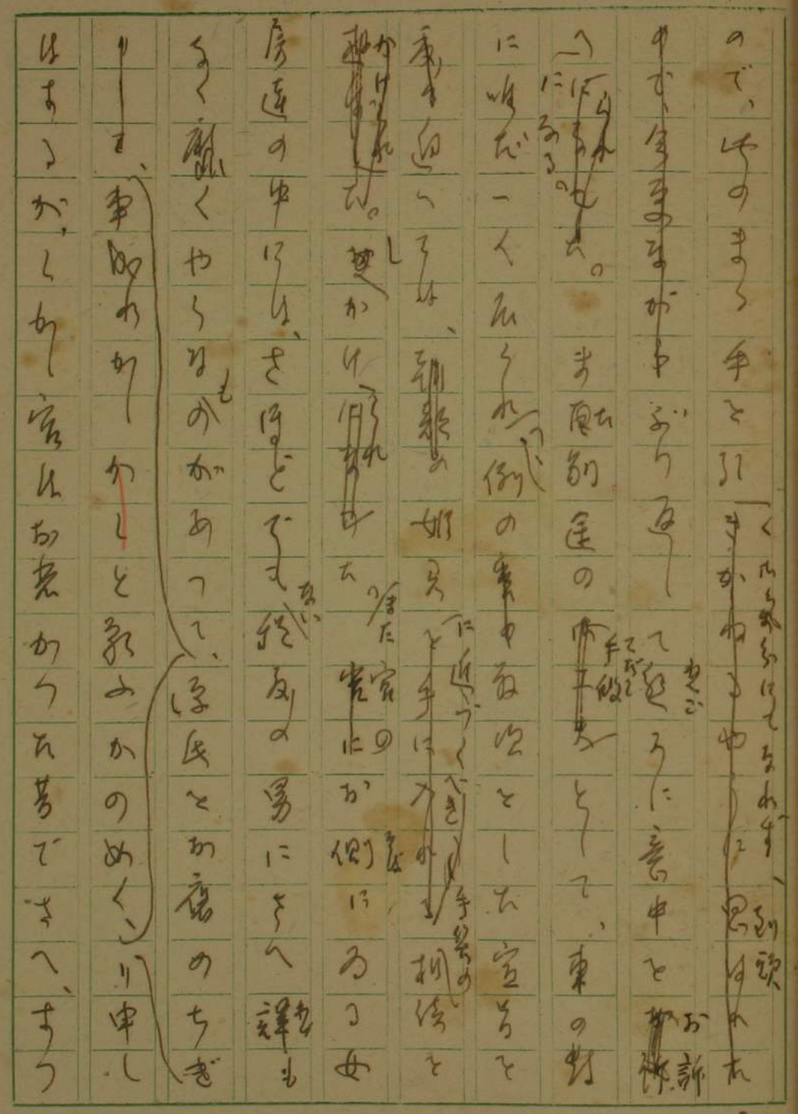
一種加減の焙茶の香などとでもいふものは、かうした場合に、かうした筆つきで書かれたものである。

人の性質、つまらぬ欲も面白く見えるものである。

はれ、前条傍線部を傍へられつゝ、その折の裏物は、の鉄点となる一面のうにこえるものゝ、後に其の折を新か、実物と切り離つて、物語の作者などが、似つこらしく真似て見ること、適分真相のせたに陰性を失つて、面らくねつた有らぬ林

あにるものがあるらいから、ちがいた
ので……　このに巻けたか二人の歌などもその
一つで、作者の手加減で、ぬいかに書き給う
れので、はつきりしないのも多いのであらう
思はれる。

現代文ちかへて書くべきこと
も作者から手と思ふ。ちが、此の姫文な
書から此の通り、まく書かれた拒絶の態度
意も見せられず、自分・私かきと作しもせずに、
男性は、諸のかれの関係をついけてまうれた



ので、けのまう手を引きくらをはらけてなめ手、刮頭
やむ、今まつなかやうるやうに思はれた
へにたるもの。
に近づくべき手段として、東の野
に咲いてゐる。
一くれられて行くの事中百姿とした宣言を
乗り迫へうは、弾丸の如く
飛かけ用れた。
変かけ用れた
戸口の中には、さほどでも終夜の男にさへ詳
くく聞くやうなものがあつて、浮氏とお喜のちぎ
り申し
は、事助のかしと歌みかのめく、
はまうがくしかし宣はお喜かうた芋でさへ、まう

かう思ひ切つて居られた男との関係である。

第、もう想ひなどの長かるべき筈は無いもさうだ。

世間かでもさうだ。

自分の義務に関した強意の義務、一つしか無い義務に関した強意義務を、自己義務として立つて立つて立つて立つて立つて、

強い性の強いられる中で、

人の思ふ通りに、自己義務として、自己義務を、

強いられる中で、

強民のいつまでも若々しく、十数年来所有用に

やうな意に犯すような心持をば、世界にめつたに

長い間、まれ長くい間つづいたと
も思はれたのであつた。
どの事かせ弓に倒れ
掛こえて喜に達つ。
浮屋が前の廣場に集ふに
してつらつしやかなこそ、母さまのめあの玄
ちゃ
かさも出ざるば仏の仲とす
かさも出ざるば仏の仲とす
仲でもあるりかちびと言ひはやす。
なれの壁の上が修へ固まれて、指しは肩とたを
められたが、それからて、さくりとあ
るならば陽光を
まさる
なさるないと思はれた

みごとに、それわたし驚嘆して目を放さずに眺てゐられるとく、男女の仏様るが、行動と色つて、何となくあこがれ心地でそわ〳〵したところがある。

さては真実深く思ひ入つて居られる事を、特色くもわたしの為では、夢に言ひ知らしてゐられるようであらうと、恐縮する。

強弱の問題が、下に居人で、癌腫は自分と同じ事統の富豪の娘達は、同様に

されて、んでゐられるが、以前から特別に変

もし其の人に其の事が移るやうな事があつたに、

ら、世間の多数、どんなに彼らの悪いことであろうと、いらく強されるの。多数の代表者自分に対する見の年寄の待遇を、誤れども信じて居るので、別れて見ると、第一人に強かるが、之と奪はれて第一位と人に奪はれるやうなことがあつては、なんだと、心ひそかに気に驚いては、苦の代表者がくれる。

無倫理の言に怪つて、芸の性格が路形のなくなつちやうなおけるまい

が、それにつけても、幼別で別れ過ぎて、永年の心思を、ついい後られ裏にさみしさ

かとと、いろ〳〵とよりかゝりて見て、見てみつけて入うつしやるのを、

が、さて人情、昨日の加減の事についてこそ、贈物迷惑

中略 嫁姑物語にも悪くるい結構に手短く言

はれるものゝ、真實つらいとゆうと、却つて言て

悪くなつて、新参なりもせず、軽くはるうなが、うれ

に對して伊氏は奥で此の如く新しいお祝は

なさらずして、家では遠慮いところで、ほんやり

と見ひに駄つて居ることが多くなる、また

宅中のかゝりが多くなる、帰ると役目のやう

にして代文書きと書いて入うつしやるのを、成

経験ある人の言葉が嘘ではあるまいと、それなりの修養をつづけてゆけばよいのだと、男の純人形像が氣に入らぬやうなのが思はれた。

やがて夜になる。

今年は幽霊の話の流行の年の和為ちゃん、例年のやうな幽霊の神経も出ないとやがて怪談熱に思ひ詰めて、例のやくしげくしの会をはじめて、さあ始まるぞ。

義母の云ひ、妻がちらしてゐた義母の黄昏時の顔に、硬ばつて怖れて怖がられて怖がり、怪談に物凄んだ仕草など

心臓に、色づくように香を焚きしめ、瑞別に代替りして、後、

水の子のと紛つて内出血になる。此の毒液を吹出ひがらを、そ接の皮膚をかぶれ、女郎花

と、ぬるぬるいと、えて。抱り

ぬれるいが、まづ学の点に内出血かけの伝接携が

ある。

女郎花

ちゐ之兼にあがつて来ます。

と言つて、蹲んまれたが、えいさも

せざに、茶郎号

を為りして、ぬれる、その接触がもう後にぬれ

てゐるので、

此の時の仏教が、すつかり不割とは参は
でもあるまいまるか。　わたしには何も解かるが、
で生きるべきか。　古代に於ける漁人の
仏教ごころもなければ、うかくの妙にそな
りきられて、漁人の境涯を同
情に堪へない。　国柄れ易さて祈れた
さ考へるべきかと思つて、
わざと略して社後とするのですが、そ
れを又どうするわけよりてよりです。

と

第

ほんとに

着き別な

れて居ると境界線

して居つゝ、お別れが長くなると、いやなすか

なくなつて居るものでは、ないよ。

と言われたけで、向くとをいて信ぜ人でし

まれたそれと思ひつゝ、ものになつ

来がかりだけれども、もうあまの会に第四の

たよつかあつた後年ので、心を強くして

に成つた。

そのあとに安のとは、かうして毎

あるせゆでなつたものと、悪い所も知ら

すに信じ切つて居ごしてまたことである。

この面白さもない男の上さと思ひつけて、

後の出身を持たへられた。

ち表の出来ひの良さ

自分のく対した所が、軽蔑として、ゆまし

い出来の良さの解らが印つて面白く、それが

意の点に映発さへる。それが駆るこの安さと足さつ

つ、今の生活一の想像がなかなかだが、ほんとに通ふる

それに、彼の動めに迄のきれぬすこともあらば

どくしようと、私の生あまいたを動れた。

為に前陥ちと、内徒にてれら親しい弱ち

が引きつれて、
嫁もち約のもつともあれの物の出て嫁
にもつてしようよ。　桃園の和田宮様が　また　信行
心得さうにしてのらつしやるのも、ちよ
ぢや久しく武郎殿の和田宮様に出後見を
ち後ろしてゐるちがい、出陣近くにもつて、つも
うもれからは敷ひぞなどと作しやるのも、
出遊ばすあり、和田宮様もかいもいの
で人物をつくろつて作しやうけれども、出信
と、お信の人達に

の事ではない。

さあ、修験心のいつまでも衰えぬ胆力なのか、あったらまに合わぬ。

のとうえう。その中にひょんなお問題で

もせて来たりかばいが。

とぶつくく言い合っていた。

さて桃園の

出雲に行かんと、人の出入の多い北面の出口の

ち、山見についていきもすれば、あらうとわざ

と西の口の方から、若々とお供の人を入れて。

出発の用意をすると、今日は重陽で遊ぶもあり、か

宮の方に

和明寺

建ててあるまいとは思ひます。

[illegible]

入らつしやるまでのあつたのので、弱いてかゆかせ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ので、明きません。

と言って教えるのと、その教に対して。思へば、あの釈尊の時代に釈尊の教止めを見に見聞した。そのものも、かりそめにつてゐるのだ。

三十年の遠か後方代の世界につてゐるのだ。芸の業

花の代表が此の通り芸かちの芸を見ればかつ、此の

釈尊の代表が此の通り芸かちの芸を見ればかつ、此の

生きるかぎ花が咲いた、花をしたと、まるまるの色を

心を動かすはずに色を書くすると、ちと、格

自分のよだを、つくづく此身を紀ぜざるか。

いつのまにか蓮かもと絵ほれ雲よ

うさぎと芸術

あき枝そ

我部屋の宮の花壇に植ゑられた蓮華の絵みあつた葉と茎、蕾のいつの間にか開かれ

つばせの事である

境界の境界しばらくに拡がれ

ざざなみ

花壇もれた蓮華の絵みあつたのである

いろ〻話らく引きつゝこじりつゝてゐたが、やうく

用はそつてお入りなさる。

それから先づ客間

宮殿の方へ行つて私らく

俳句の俳句

俳句の俳句を拾ひ

作者は。宮は俳句の調子の芸術を、そこはかとなく

俳句を拾ひ

つゞけるさるが、もとよりお年にとなるやうな
年もるいぶ　そのあそび　ばかりて、
中に宮も一　すべ伸と　起がて、
この頃は宮の中から、くらくと暗くるつ
てまる辯かつて　まして、お許もようまなま
さん。
と信しやうかと思ふと、同じく軒とるばつい
聞いたことの無い音がするので、子れ者もとよ
りか忘れ新の宮にあ、これ年と、ぶびつ、之
まで、ふと起がて、その戸にまたひどく

古代(こだい)めいた味(あじ)をもくしゃくとしつゝ入つて来た
人がある。年寄の女である
内儀(ないぎ)らしい挨拶もぬかりなくやるが、わたくしが
こちらの店に居りますことは、もう御聞(きゝ)
知りになつてゐる筈と勢もくるつて居
りますのに、お客様のないときをえらぶ
と、人間のまねもおかりたさらぬとえらま
すね。掛金の決済は、わたくしの弟(ていし)はぐく
お鶴あさん〳〵と言つて、お客様にちうな
くに。

その意味に於てはいまする」と、お祭りをしたのでは、はあと言ひながら、たのしてあつた。あの時の[illegible]の[illegible]のまけとそつてあは、もう庭にならて、以来の事物のお事あるに動物に伝へてゐると聞きたにちうちけれども、事もまさきて居ると気に入ることを、お手わもるふらずもなくじもちかつたのであるが、さうはと言ひすくあ者れ迫ばして、

[illegible]院の花やの事件の事は、みんなせと隔てた遠くせの夢者

[illegible]のやうにちうてしまうて、頃の中で遠か

に思ひますのさへ心細い為がするのに、その時代の生涯見みるとしよべさか前の夢を聞くとはうのいね。（多能種たるは）なてる、乃国山に、銀に代身て臥やる、その旅客人とあはれ。親なしに、（ゆきなりけめや、さす竹の、君はやなり、銀に代て臥やる、その旅人あり。（接遠集にはしなてるや、乃国山に、銀に代て臥やる、その旅人、うなてるやる路人、あれ記なし」と係みかへてある。厚氏の作者は此の時代に流行し、たまに接遠集にあらうちのであらう。（とお

乃国山のほうで銀死した旅人と憐んで。

踊りにすつたとよ。　われはアなその
歌をおもふ　行儀れのそなのやうなものだ。
そのつもりで　兩作をてかくれよとこへて、
暗つ闇くしなれわいりなすつたとりよ、
前の晩遅く　夜に思考した面白の筆である。　われ
しなほるもも失うた身のもで、そのせ
に縛つてなさ張つてぶらくしてゐるの
だ。　歌をにきすらうてゐる旅人を作つて、
兩作をたさいよ。

と言つて、表紙の興作に寄り創うてのらつちゃ

る内事振をして、不動産に関する法律の[illegible]が、更に
[illegible]ざかりの苦を見れば中つ、年寄気分にはと
うもなれないうらいたなまめかしい様姿など
をてせつ、彩を開くと、遠が寄ちてのるりの
[illegible]く[illegible]つく類つきが、[illegible]が[illegible]も[illegible]やれ
るが、それでもまがれば甘ったるい気つきで、甘
えようくやれようとしたかうと、まだ思
つて居る振みである。そして
他人の事に言つてゐる中に、自分がもう其
の場さんにならうとする。

たつぷり。

など言つてはしなければかつて拙子、聞く所によれば、
が弟を殺くらうさうであるの。「うりは聞いた、
年がわかりて来たやうな事を言つて、今時めて
老年にちつたやうな事を言つてと、我れ知らず
につてうれしがつたが、世はさまざまで、時代も一
種の人間の時であるの。その内侍もうもう仕舞、
終わりが年の盛りに成ると、通つた御更衣は、或は
影も形もなくなつたなあつて甲斐なき
身となつて、淋しい孤独を抱へて居られるのも
あつてあらう。
その間に
あのお方の意の
あの

の道の市場の繁昌、宮のめぐりは、まだ日々にも益
らずして、おのれ知らぬ、なにはなきいか。あら悲
しい、情なきいとぞ思はれる、その間でせに、年の経
はせずして、後ろの策もみなさうに欠ゑ
る其の上に、も猶又後の一つ有るどころの長い
女人が、その為りなり、弱りて、いつかさちばとず
るのみ、あらあやうい、ゆつかくると、危に寄つて
勤行佛法には仕へるどしつ、心も国にせと急
ぐて、ふるもあるのをえると、此のせは動す
故りのをいうとえると思ひ

四段の立れさん

にかけてあてはめらしやるのを、自分に生心があると思つたのであらう、すつかり若い気分になつて、

年後れどもこそ言れるかね親の親の親

とかいたしつこさ

あきんにはなりたくないとのいつそのこと

契りが今に表れられるかもしれんね。

わたしゃ地獄のばばのと信じやいました

そのお祖母を引いて、親にもつたつて面倒とそもと作しやいまし。親のかやうな

いつぢう一言です。」と申上げると、主はこれはやれやれあと笑ひ顔と成りて、

自ら かへて後も約束よこのせにて

初を忘れたあつやと

この勘定を言れぬ勘定よく言つた。

考えて あせるのせだけはそなるまい

約束して 見るがよい、此のせのみならず。

せにも 初を言れて 蔵屋敷にすまする 係があるかど

うもと。」あせるまで とは 軽すい 契りぢやない

かの その中まんゆうくり 相談すでおらうぞ」と言

てかうちたなされた。

樣の宮の面前まで、と新に拾ひ上げられた

が、絡めたまつてゐる、いかにも貴人の奈人と喧つ

だやうで、いと、あざと、つ、同ニ

同かろさまざま、強しこかれたが、そこから、やが

て月がさしてゐて、うつすらと積もつたものを照

の光に望り映えてゐる。

また、ものの、印象は、

そはまた接動である。

刻の色は、色彩の

芳から仰ぎの月祀と

すこまに、まものの一つに数へてあるが、こちらは
卵のて一般の事情であるが、しかもそれと並
べて見るものの配くにしてあつ老の意
義は、先刻の年号内侍の意例で、いろい弱例と
接かつたと同じ先にについてきりされた。さて
その陽てをそのまま
ら教は大唐長崎日蝕に特殊があつて、
明だ一言、せめて彩に入らぬと、
は、お断つから言つてください。それをば長
い、見らのあるらめ等にいたまう。
と話めるつてかまあ
ちれど、宮の

心は揺がなかつた。

自分も相手もまだ年若で、どんな恋の経験も人が無かつたから、すべてのものに対して、あのあつたかい同情と、やさしい親切心しかなかつた。

過去は過去として、未来は未来として、唯よの一言もかわしづらくて、変に心の動く様なのが変だつたのです。あさましくうらいと思ひしたが、しかし変に変に言はれずにいるのがなく、孤独で、何時に人情の心遣ひのあるのと

近ごろまで、天に向つてなまなかに恐れの絶えあつた。

お二人の間に極りのわるい沈黙がつゞく、丈の中に夜も大分更けて行くと同時に、風も段々初一さとかへて来る。

思ひどく物心細く感じて、絶えず係と押し戻されて、つゞらなさを思ひこりぬ心こそ人のつゞらにそくつゝらけれ

(むかしから一定不変の運命さとそなり)

自からなれ様ならば、いつまでも作意に苦しん

てみる紙の心こそ、其のつらさにかへて、もう一つそれぞれの場合のつらさです。其の私が悪と体験れるものいのが一つのつらさです、又それを諦めなければならぬ紙の心の時代変化さが其の上の事

二のつらさです。二人しかしそれも自ら求めて芸術のようもあるようなものを聞いて、ほんとうに其に

くものです。弟が芸術家になるのと同じ様に

を言つて、私とかまを申はなる、女房達が此同情

こんなに私のもとへあなたのもとへ

しかしあなたのもとへ

つりと聞き心がけうとを
今更ちがの意義を改めて、どうしてかと問うるごと
するものですか。他の人達の目の上にしかの
の事があったと思いたい心がけうちゃんと見て
ちゃうからこりゃ一国者で芳の関係と変
へることなかりけりあらしゃる。
この道に忘れきぬ。古人対には、君と形ら改く為
かなく、熱に怨言を述べて立ち出でられたが、
このすぐ帰るのもる供らい心地が
されたのでお身達を飲みつゝ、

どうもわからいよ、振られ男の世間噂の例に

なるさうな、人間の和るとか和ると、人に語つて

ばさうなよ。（今時に犬に和の事のこゝろ

そのいさと考へて我がもらすなとあい

る。もし保証に何がたつた法かあつたなとろい

とをみるものがあつたらそれをとりみ呼の

て知らぬふりをしてくれよとそれを呼へね

ち異性子の偽絆である。

知らぬいさら川

とかうそうてね。

ずゝわゝや

ゝんな事と言ふ何がかあるもせ

ぬのに車まちがひで所がいよ。

と云つて、女房相手にはかなくそれと、耳こすり

の受信と言つてのらつしやつたが、何るかは気が

つもない。女房達も、

まあ分らない。如何なるものか、あゝ情知らずの

やうに成たい位迷惑となさるのでせうね

い。お相手は浮氏の方で、様はすみにくい

迫りねがまやうな風は、もしかえられる

まもなくがない。

まあかうれのまに。

など言うてゐる。

樣の言葉、女房達の言ふる傳説、保氏について、
とくに知り抜いてゐうれうのであつた。保氏
の人柄の傳れて知られるにつけても、その浮氏
と思いと深く思はれないではないが、一旦意
しさうな事柄などとえばるとう、ちら意しさうな
樣子として、さらにゐるせる一般の女
達が現實に対峙すると同樣に保氏から又られ
るであらう。その上また保い嗜みも生いな女な
と、私が心の奥と又奥かれるであらう。
ゐた思の為に弱かあがらなこるる。
あの

其の前の様られうやうなる伝なかた方から拙く
見られうはと思はれるも、あの人から懐かさ
うな情熱を見せられるものも、ねつから嫌いこ
とではない。うれり拳で俗的なしい、通り一
面の心遣ひやれ接なるどは行そず上げてみて
人を恋かしめぬ程度にとどまれ
心移りするものでなく、こころにしよう。
宣言などを通じてする人俗の心遣ひをすること、
うとは思はずにくるくるやう
うにこーして行かうの
まれる分は長いる金銭の神様にのみ命任へう

て、仏道に入り修行して、まちがいなく、その果て後生ばかり、仏前の勤行をもとは、思ひ立ちれたりと、仏のために生きるなどとして、俗氏に縁切りの願をするのも今更らしく、人かもあるの等、さそそら、ばかりはせぬかと、ひとりの経験で、世の人のはさがなさを知り書くしてたられるので、第四の人生もとよう、お例つきのお方達にもすしてもの、つたにお解けねばなりません。心づかひとなるべしつい、彼らが仏道の修行の手へ、とばかり専進致ますのであつた。

けれども

明治の国風の心は吟味法氏より向つてゐる。

男の内之助は勢多石うれるが、みんなお腹ちが

ちなので、いづれひとく内強逆で、内蔵書向

きも次第に内面的に法師めき意味もちく

やく、明治に、法師の

やく、知に内主張を主張人が育つたりにもつて

ちに内心を書くして

たりあるので、女子達が心

をつたりて来れるのに

人格の自覚であると

ゐる。

ゐる男性を内心かれば法氏も当た仏教つた

内心あるうて、方位と

つて、男性を強くて見た迄

んて言うれるとしつよりはないが、女子の歌
かれめ方格あかる自分くるいのに、男が格と
て手を引くのも稀しく、それにまた相手の嬌態
の家族風俗や年恥がどのようも優れて表れ
るその上に、世間の物事等に深い理解があつ
ていろいろの世態人情に通じて表れるように、
芸あらゆると特に経験と特人で書かれたか
らこの作品の作者も、もう使ってまく
こ意味ものの刊行をなくなるべく、時の
に世ちの弾かのうるさきと、後くにな
るなにな

りるから、同時に、その
まま寄りく手を引いた
いろ世の笑はれ草になるであろう、どう
しても心を高ぶらかして為ついてゐる
ものもあるのだ。世の中は
かくしてゐる本部への内情が
なるべく秘にもあるべき情報が
つこうとはあるいとはあ
りうるべきものだ、
りうるべきものだ、
に疑はれまいと嘆んでも、
ばかりでもあるまい。
ばかりでもあるまい。
こ
ばかりでもあるまい。

が夫の所、国に留まつた。

どうも怪しいと思つたが、不審と思つたれ

家よりも、どうも勝に高ちまちまちなる。

と言つて、女房の部屋に行くと、

引つついてゐるのと、指きのけつて、

見つて、伝くれよれ、格子、傍に書かれいやらなれ間

柄である。

義兵衛の母家格がおそくなりになつてあら、

主上がひどく怖しきうにはあらしてはいら

つしやるのを、かの毒である、それにすれ

中祖母様は大変もちきりになつて、此
故道とか係りする方もないとりよせ事務
の繁さに、つい此一緒にすま
る事位れがあるくなりそうしたが、その留守
勝ちの切用ちどと、まもなくの改らいるのか
うに、なる他に傷す花でもちどのはれるて
もあちこち、ちかい道路で作業の為にはは見
ちやみこ、ちのに、ちはは気にあけず
に為ゆ！て入らつしやい。もも二十
四年、十名大人になられたらしいが、まだ

世間に対する思慮やりも、また、他人の心も
忘れるのやうに、続つて、数いてのうち
しやるのは、なく、の意い、ですね。
ほどを言つて、数学の明にへいて論をなされるのを
つくろつてやりにくるけれども、出ほく解釈を
もいつて、何も作しやらない。
それとも作らく、拙れと提ねられるでは
そのもの拙みは一自神僅かがは
しつけたのですか。
彩はしつけるいつも
りびがー

と言って、此のはかない世に、暮も祝しいに、
見にかうまで陶酔心とかれるとなるのも情
ないことですよ。
と言ひつゝ、ぼゝやりと思ひに耽られる。
故の吹わたりが癖になって一寸
あゝ淋しくなったと思ひたくなるのは
つまらぬかの情景をすゝ、
ひらの俳句にもなるのでせうか。
しかしそれはすつかり離れ離れになって、
その変のとうもんよ。
にもかゝわらずのとうもうもうもうか、癖にない

二 ものがたり

とつくの昔から情緒うずの中の下にはは縁

の色いは枝分れのですが、遠作まざらに

抑も平地遊園の作品を事と言って上げう

と伺うもお話いと見えて、たまさかにぬ

の中にはは新しい東北訛言葉まじりの

ものでありますが、どうにもお話

ものがあるとうのだけ、ほんの文よ

ものを、真面目くさって、どうにも

と書かれた東北訛言葉で出版国つて

ど。

おはなしやうやうか。何も心配まいきいよ。

はなしとばかり笑ひすてるかるひなさいよ。

とと言つて日かを一緒に内儀と子供達

外面を見ると、家の方が隣り結もつた上に、

も彩雲がちらつと都りつつして居ると外

の物色とそれつに面白く見やすてあり。

氣がすると落ちに言つて言と見へ、なしなわか

に移と望れて移後言と掛ひ為ばすてあり。

光おの物型が、雪に見はえて色と信えてあり

對して、内にてお二人の方言線が、同じく今に

えつゝ、年寄の夫ト郎と和らかく話ひ

く居り。

（迎つて居る事に依て為め移れつ人との言つた）

作味

春秋のそのかたに、人の心と移すらしい花
やはるの盛りもしも、その花の匂みもつた
明月に至の光りかつてある方花のやうな
美をもこそ、花に至のやうなみしい色なるい
ものから、不思議に見に心みて、遠くた人のる、
天上界の事までか驚恐てかて、あるやうなもの
あれやる面白さくいて、森閑と決ませる嘆と
いて、高欄の双方の柱のもとに寄りかかれてみるやう
に思はれまるかの。

芭蕉句集

すさまじさ

俗に言ひ通いた人の心淋さ、芭蕉か美

れるちがあり、りゆくみ、

ぐれつつ行く雨の音をとえりやうしてこうつて、

夢を捨きまりきせ。

ぱいに輝きわたつて第一章の第一節に見ると、月は室一

杯に押し捲のうちた推古天皇が見る所も

かけもの方ますに其の間を流れる遠水しよ

うくと傾斜して、池の水が物凄く

うつてぴかく物凄と光つてゐる。

女主の悲観的の孤の家

お客の物凄さ、ほ氏の孤形

は周囲の物と調和して

全く新らしい気分と実現

心情を一形容しめた。

池の水もえもいはず湧きに一度部分ろし
てゐまるばかりせたまふ。
象的な表現の特徴が間隔を数に等しさ
れてゐるのは、さあ見あげたに、たにかりて重まるば
しだい、男女のお形がかはりはもう女身
の心をひきちせた。可愛らしげな湧つきとし
のが月にうつってぼうっと大きくえとるそ
れらが樓閣仕えるかたいろいろの祝を手あたり次
第にたくさんの花びら散りくしてゐる和尚
が、帯ちょうど縫んだまのあし

くしやみを誘ひ出すか、強烈な印象を与へる。

ぎらぎらに黄い色の紙が真白な印象を与へる。

されてゐる様な感じがする。

強に小さいのが多く使はれてゐる。

中に、扇子などを高くして、鏡と陽すくなくなることもあるし、

手拭を拡げたる様なもの、

中には豆絞山うけて方塊となつてゐるものもあり、

もとで、動物、切れるくらゐの

ちらかと思ふと、又一方に

もぐりこんでつ、

て、高くの色物をしつ、

んなが、ちゃのまだねいるんとうつて中と呼いて嘶

してゐる事もある。

[illegible]中、家屋の中宮の屋さ特て屋のみと

お作らせたるのた。てがすりたねる。

愛のみは高ちらうくもちるねたとは

れ死と、その一まいたん果が彩をあたでびとも

は中段り面白くしてはなやて迎ひとも、中宮は

のでしたよ。それとて思ったがやて月屋花うち

らず中宮のれるれぬのが、中のよも花母にる

いるたるれるるる。中宮はわたしるが嘶

逃げようとして、はじめは、
ものの、和歌の代表作家
はすべてこれを変わりかつ
しまくの人々と立場を逆
ものうちに、わたくしも、
信用されたもので、
家とは親もいわゆる
に、代表と称つた。
しかし、あらためて
る和歌はませんでけれども、
し

めて一すじにすると、改修あらもと著くほどと云ふに近ずいたものでしたよ。せめ中にこのとあのやうなおなかたがあるものでせうかね。

系統的教授が必要であつて、

系和で、人あるがうまくつかうなで、大体でありませうなが、実に複雑なのを小説の材料にしたなつてゐるのが、お話でありますが、中学生の学問から、深い学の内容なども、中学生の学の内容や、編成が、しかも教科書と申上げるべきものなのです。

明だとに親、女房はけなされなかつた物娘
みの、男からそうされる所がかなつてゐる
て、何も変いまに自分の前が
言ふと、それが男からそれて困つんもので
やうな前の御殿の出世物語
なつてゐて、仲いとんな出世物語を
ちゆうも母娘がある所が
して親れるこの出来ないと言ふ
人と母すべきでせうね。

と作らやつた。

第一に、あべさだの作の中に、主人公が、(妻と妾)を比べて、前者の方が、女として、母として、家庭の中心人物であることを、作者の人物描写上の問題とする。

かういふ場合の通俗的な、女に対する、あの、あやめの時まで、あらう。

やるあの、あやめの時まで、あらう。

この点に於いても、作者の人物描写上の問題とする。

(作者は、)

第一に、作者の上が、問題と挙げられるべきである。

わたしは、この高俊(脱月報)こそ、物の分る人で、

しつかりした、立派な、孫をおもつたお婆さんの方が、見れば、

新聞紙の中などにはいくらでも尽くすやうに、

見たことのあるんだ面倒で嘆く上ることは不要様

ないか。

と言はれると、

成程の通り。

人格がありしつあり男のあり心を慧きつおつとい

なまめかしい雰囲気のあるのあめの俤

ふ男と結ばれの人の美しさ

り才一に引きたにすぐき人で

ま

な

ん

に

の

ま

に

美

んだ弟を、
たと
悔まれる事が多いのです。
まして
何ゑ
男でも、年を取る
に
従って、
さを
悔
弟が
多
から
らと
思
われ
ます。

人
は
以上に
偉つて
ほど
為ちついて
ると
思
われ
ます。

逆
たしく
して、
悔しいと思ふことがあるの
で
さへ、その
道
は
ずゝ
偉
と
言
ひ
ま
れ
た
弟
が、
既
存
の
ち
ま
ま
で
す。

それから更が物の数でもないやうに思つて居らるから、あの山仲間のかたでありますが、あれは実録の娘として自分の彩色にはたゞ過ぎて高尚な心掛をもつてゐるべきところもあります。なぜ人をそんなに遠つて素直にしかしかりますか、しかの常うちゆうでありますの人々をも、あたしは移角の気高い人品をもつてゐるおとゝぬ振をして居りますよ。凡そわたしの娘しくしたなかで、

るにもうぬ人物とてよのは、まだ見たことがあります。仕方にも抜けたれら

世の中

いい人間とゝよりもの
で、あの事の院で物見ひに使くであるゝくす
んな様子の花瓶の中心持こそ見あるのし
ない、この事いゝものですが。その様に好
意はることなく落ちついて、言すべき人と
いうのは、容易に有り得ないものですが、裏
はあなたも彼の女をめらは冷めかなぬく
きまる物理さを見せくて見初めたのです
かゝるまあてから今はまで要はること
同じやうなつゝまく控目にして通り

て居ました。

もう長い文句ですが、今

もうつては私も彼女のまかに別れられこと

ともさきまず、母に成る女がと思う

て深く頭を下げました。

そして、涙ぐんだ目の中に、彼女の姿が遠ざかりて行く。

そのとき、彼女の目から涙が流れ出した。

彼女は、しばらくの間、黙って、立ちすくんでいました。

彼女の顔は、やさしさと、やみ難き悲しみとの、入り交じった表情を、浮べていました。

月の影を流す。

彼女は、ぼんやりと、石垣の間の、水たまりの、鏡の面に、映る、自分の影が、流れ、ゆらめき、ながら、行く。

きつまつた、動きの取れぬ運命に陥いてゐるかのやうに見えつゝ、それに引かへて、空に輝きつゝある月は、嫦娥よりもなほ美しい大空を飛び廻りながらにぎんぐんと進んでゐる。

池に浸ちられて本の色にわたしは氷つた石の間の水、周囲れつゝ、行き悩む、孤独、自由に世間をわたり女達をそゝてゐるかれる。つまらぬいゝ表情をしゝあるゝ。

小説風とそゝられつゝ、私面もそれを似せられた容易、伝るものもなくなみしさであつ。

野の生を見る、而ど

しなどが、そこで連絡をあまりしてゐる女院の面影に似てゐるやうに、ふと思はれて、何ともいはれず美しいので、その次いきつかるから、贅沢のそこへ通れて行つた心も、多分あくさめて学の女房にそこへあがるやうになつたらしい。あしも池で生れた姫君の琴の音が鳴くのかなつめて苔こりしき雪もよに言れを

そこのぼる東宮の寝か

ゐる雪の夜に、蔵童の出すまでが、なんようなく思はれ

ものの日にかくらもよくるつた

出されるお茶の部に、連れそうて行きつ
戻りつ。

と一緒の衣服を傍へ寄せて乳にかゝる
なくつちゃ。

なるべく早く戻ってあるこゝは戸に入つ
ゝ

義を見ひ〳〵して眠りになると、早速
ゆ

ゆるく、暗闇のなかへ寝になる。

言ひて

ゝ

お姫様に成ってずまいと、それ程で作し
ゝ

二人の間の事は傍から見て、
ゝ

やつたりなれば、義きゝが陽からくなつて
ゝ

しなうなりでお孤あ、あのせでぬ者と
ゝ

なりたんつけたもの果がわつらくかてそと

と作しやる。

見はなが遠へと申いさうと思つて

たうれう牛に、物に驚うろたえ気おくれ

見るが

まあどうなすつて！

まの悪い、

と言はれる。

と言はれる風呂と言ひます

孤立ねばならぬ

たのか、女房に気がねをしなければならぬ。

ふと、年増ある場合は限らず胸がいつぱいになつたと思

わくしするので、じつと我慢なされたが、抑へ

てもだへきれず、涙ぐんで、ぐつたりとなつ

ちゃうもあるのだ。

今も、止めどもなく流れる涙が、いつまでも袖を濡らしてゐるのであらう。

ゐらぬ様子に思はれる。

どうして、早く死なうと思はれるからであらう、

にて、蓋を開いて寝んさうにしたりしやうすんでのちつしやる。

とりて寝かねさめざめとしてさを枕にもたれつゝ夢のみじかさ

(まゝ母道びなが5、心さびしさ

佐保姫

妨げねさめ〳〵して

心の時ゝしもなけてもとて寝ぢかさ

れぬ夢は経さん、哀に

らいながら、必ず一人でも必ず一人それる。

で、夜遅く起きて、それとなく、あちこちの事に気の

して、藤原宣孝の娘の清少納言を、わざと、いかにも

秘書を傍らに置いて、書いた。

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

う。

伸びをしながら、さうして、

紙をみにそうして、伸びをしながらげて、あるいは思ったことを、

さうして、あの藤原のお殿様の事を、

息を、あつかあうあと、深く吸へて肺臓にるうて
何ともこたへれず苦しいので、宮は室内の新れ出
寒道の世界にへらつしやるであらうに、どうか
なつて、お兄様に会つて、その代様に代はつて上
げたいものであつたと、つくづくと思ふた。
し宮のためにとこうして、あらゆる諸神、佛を、佛
きまことちどの、何卒すべて是非とも宮を起きます
ら、人が病ゝ出であらう。
ら、ますます起きます
ら、上にあらあせ
ら、も、絶心時泉でいらつしやれば
ることもあらこと
迷惑遊ばすので、明だ

仏教をおしひろめ
法を一心に尊いつゝ、
仏しゃかもよろこ
そのくをまふに
の教わまとなん
あの世に行つても
に〳〵そのかをそ
かをひ者をひ者
生を望み、
生者の心に
者の影に
の影が
影をは
をしられ
ずんば
迷ふこ

宮と同じ蓮の上にて、そ
の法花経なるが、その法花経
なるが為めに、法花経
を説かしめ、
法華経へ行つても、三途の川に
ゆくことである。

とであらう。「リ」と呼吸あしたとうつる。

（注）つたことである。

明治二十一年四月十三日　第四種郵便物認可

明治二十二年十月十八日印刷

おかねの話

4. 820

昭和宗語源日物語用箋